

古屋島七兵衛

長谷川時雨

青空文庫

古屋島という名は昔の武者にでもありそうだし、明治維新後の
 頭けんかん官の姓名にもありそうだが、七兵衛さんというは大変心安だ
 てにきこえる。葱ねぎを売りにくる人にも、肥こいとろやさんにも、薪屋まき
 さんにもありそうな名だ。この名を覚えているのは、あたしの家うち
 の書生さんだったから——というより、道どうじゅうろう十郎めつかちを思
 いださせる顔だったからだ。

道十郎めつかちというのは、キシヤゴの遊びで、つぶの大きな
 キシヤゴを二つもって、上からふると、片っぽひっくりかえって、
 貝かいがら殻の背でない方を出す、それが道十郎めつかちで、なんのた
 めにそういう名がついているのか知らない。それとも江戸から続

いて有名な役者 いちかわだんじゅうろう 市川 團十郎 の代々が、大きな眼玉で通っているのので、片つぽひつくりかえつて團十郎めつがちが転化したものかどうか、それとも他に ゆえん 由縁があるのか知らない。

それはどうでも好いとして、古屋島氏の顔に、きた 汚ないキシヤゴの道十郎めつがちがついているのだった。おまけにそれがばかに大きい。濁つて、ポカンと開いた黄色い中に、ひとみ 眼球が輝きもなく一ぱいに据つて動かずにいる。ばんだいづら 盤台面で、色が黄ばんだ白さで、鼻が妙に大きい。ザンギリで、下を向いていて、ヘエ、サヨサヨという時だけ眼球を上にあげる。

書生さんといったからとて、五十近かったかもしれない。黒い前掛けをしめて、かくおび 角帯に やたて 矢立をさしている時もあつた。

「あれはなんなの？」

アンポンタンがそう訊きいたことがある。

「あの人は公事師くじしといつて、訴訟がすきで——さんびやくだいげん三百代言……」

アンポンタンは子供心にこう理解した。代言人のそこへくるから三百代言？

三百人は来はしないが、そういう通いの書生さんは大勢来た。

よく考えて見ると、自分たちの手におえなくなったものを担かぎ込んできて、便宜上、先生先生とやって来たものと見える。そのうちに、小さな仕事——差押え解除だとか、書翰しよかんの写しだとか、

公判の延期だとか、相当の用をもらつて、彼らはもぐりでなく、大手を振つて裁判所に入出する特権を、幼くもよろこんだのであ

ろう。

日本橋区馬喰町の裏に郡代とよぶ土地があつて、楊弓や吹矢の店が連なつた盛り場だつたが、徳川幕府の時世に、代官のある土地の争いや、旗本の知行地での訴訟は、この郡代へ訴えたものとかで、その加減かどうか、馬喰町には大きな旅籠屋が多く残つていた。おかしなことに、古屋島七兵衛さんは、郡代の裏のずつと神田の附木店によつた方の、小さいぽけな、みすぼらしい木賃のような宿屋の御亭主であつた。

ある日、眉のあとの青いおかみさんが女の子を連れて来て、祖母にボソボソ言つていたが、またあとから白髪しらかの黄きろいのを振りこぼしたお媪ばあさんが来た。二人はシメジメと呟つぶやき訴えていたが――

―道十郎めつかり氏が浮気をしているのだと――其処そこへヒョッコ
リ七兵衛氏が帰って来たので稼業にせいを出さなければいけない
と祖母に意見され、へエ、サヨサヨ、へエ、サヨサヨとつづけぎ
まに上眼うわめをしてお辞儀じぎをしていたが、子供と三人の中へはさまれ
て、角帯に矢立をさした年老いた書生さんは夕暮の小路をうつむ
きがちにブツブツ小言をいいながら帰っていった。

「争われないもので、どうしてもポン引だ。」
と七兵衛さんの後姿を見ていったものがある。

「あれでなかなかひっかけるのだそうだから、あのかみさんもそ
の手で引いたかな。」

この会話は聞いていたアンポンタンを困らせた。早速質問する

と、言ったものは困った顔をして、繰返して自分が教えたといつてはいけないといつて教えてくれた。

——ポン引というのはお客を釣ることで、ポツと出の田舎の人を釣るのだが、七兵衛さんは、門かどに立って夕方になると、宿とまり客をひくのだ。手前、何々屋でございませう、いかがさまです、お安くお宿とめします。お座敷は至極奇麗ですと——

七兵衛さんに急用が出来て使いがよびにゆくとき、あたしはコツツリ連れてつてもらった。門に立ってお辞儀している七兵衛さんを予想したが、おそろしく不機嫌な御亭主面をした七兵衛さんが、薄っ暗い家の中から出て来た。大きな顔が用向きをきいて笑った。黄色い粗あらい長い歯が目に残った。

七兵衛さんはそれだけだが、大同小異の書生連の中に（通いの三百代言上り）壮士——その実遊人上りが一人、その子が一人、旗本のおちぶれ兄弟が三人、仕立屋さんが一人。

壮士荻野六郎は達磨だるまのように赤黒く、毛虫眉まゆで、いがくり頭で、デツプリと肥ふとって、見てくれの強そうな、胸をふくらましてヨレヨレの袴はかまを穿はいていた。あんまり字は読めないのだが、腕組みをしてだまっっているとともかく強そうだった。強い方の役目をするのかと思うと、そうでなくって、一番奥のものに摺すり込んでいた。競売に立会って、せりおとしてきた細かい装身具を売り込もうとしたりして、

「嫌だなあ、そんな娘子供のものはとるな。」

と父からよく言われていた。ばかに強くなる時があつて、あいて対手は百人でも怖おそれない、先生を守るのだと力んでいたが、あたしの従とこ兄の肺病の薬を自分の家うちへとりにゆくと、あたしを連れていったが、自分のうちの門口へくると、

「おつかさんやおつかさんや。」

と猫のように優しくよんだ。どんな年寄りが出てくるのかと思つたら、色の浅黒い、顔の長いひつつめのいちようがえしに結つた、額に青筋の出ている、お齒黒をつけた、細ほそ一子かたこの袷あわせに黒い帯をひっかけ（おかみさん結び）にした女が出て来て、

「なんだ今時帰って来て——」

と突然^{いきなり}どなつてつづけた。

「なまけものめ！」

「そ、そんな事はない。」

荻野六郎はドンモリになつていった。

「薬が来ているだろう。」

女は返事なんぞしないで、困りきつていたあたしには猫撫^{ねこな}で声
で、

「まあ嬢^{じよつ}ちゃん、御一緒だったのですか？ 爺^{じい}におんぶしてらっ
しやればいいのにさ。なにかまうものですか。お薬とりいらし
つたんだつて？ まあ、まあ。」

そしてまた六郎にはどなつて睨^ねめかえした。

「わかつてるよ。薬なんぞ、今時分ノソノソ取りに来たりして！」
彼女はニヤニヤと笑つて、キュツキュツと長^{なが}刀^{なた}ほう^なず^きを噛^かみならしながら、

「嬢^{じょう}ちゃん、ようく覚えてらしつて、祖母^{おばあ}様に申上げてください、あたしが晩にもつてあがろうと思つておりましたつて——ひよつとこが余計なことを言つちまうから……」

それでも縁側まで薬をもつて来て渡してくれた。

「巖^{いわお}夫^お、巖^{いわお}夫^お。」

面^に胞^{きび}が一^いぱいな、細長い黒い顔、彼らの一人息子で、父六郎と同職業のいささか新智識であるところの少年と青年の合^あの子^こが、母親譲りの、細い小さな眼をもつて、赤いシャツを着て出て来た。

「嬢ちゃんのお供をして、お前、おふくろさんに薬を一度お見せもうして、それからすぐに御病人のところへもつてつておあげ。」
閑却されて、使者の役目まで悴せがれに奪われた壮士は、撫然ぶぜんとして悴に命令した。

「いちどきでは、せいが強すぎるといふんだぞ。」

「よけいなことをお言いなさるな。」

彼女はグツと睨ねめた。あたしが帰る時はもう、彼女は物干棹ものほしざおで庇ひさしの上の猫どもを追いはらっていた。

巖夫は道々、半紙を四つ切りにしたのに包んだ、一服の薬について、いかにそれが靈薬れいやくであるかを話してきかせてくれた。多

分の誇りをもって、そうした靈薬を手に入れる苦心を繰返していった。

「我々が忠義なんだね。」

彼は子細らしく額にたらしめた、油でピカピカ光った毛を振りあげた。

「どうして手に入れたかとなると話が大変だが、我々は若先生にしようと思う、大学に学んだ人をあのまま殺すに忍びないからね。もう半年で卒業っていうんじゃないか。」

それから言った。女の子なんか、鰻うなぎならメソツコみたいなものひそで話にならぬと——それからまた声を秘めていった。

「肺病には死人の水——火葬した人の、骨壺こつつぼの底にたまった水

を飲ませるといいんだが——それもまた直にくる事になっている。これは脳みその焼いたのだよ。」

あたしが真青にでもなったのであろう。彼は近々と顔をよせて、小さな眼を凄^{すげ}めに細めて、怪談じみていた。

「僕の母は——お寺の隠^{おんぼう}亡と知っているのだ。」

巖夫は十六位でもあつたのだらう。両親がうまく取入っているので、玄関の書生は絶対におかない家なのに、何時^{いつ}の間にかい
るようになった。神田あたりの法律学校へ通うのに、例の赤いシ
ヤツ、夏は白シャツ一枚で小倉^{こくら}の袴^{はかま}を穿^はくので、横^{よこ}つちよから黒
い肉^{のぞ}が覗^{のぞ}きだすので子供たちが笑うと、小さな眼をとんがらして
怒った。なまけ学生だったに違^{ちが}いなのは、本箱に入れてあるも

のは、二三遊亭さんゆうてい円朝えんちよう作の人情にんじよう咄ばなしだった。時折女中たちに目つかつて喧嘩けんかの時に言いだされてしよげていたが、子供たちに威張いばるときは、円朝の凄味すこみで眼をしかめたり、声を低くしたりした。

旗本加頭かとう一家、三人兄弟は、一番上の義輝よしてるが凄かつた。それこそ、巖夫が円朝の怪談ばなしでやるより真の凄味だった。ある日、あたしはお稽古けいこがおくれて、日が暮てから帰つてきた。そのころ、まだ燈火の種類がさまざまだったので、花瓦斯ガスが店の屋根にチカチカ燃ているかと思うと家の中は行燈あんどんであつたりする。あたしの家も洋燈ランプの室へやもあれば、行燈もあるし、時によると西洋蠟燭ろうそくをたてた硝子ガラスのホヤのある燭台も出ていたりした。

「ただいま。」

といつて奥の間へ行くと、行燈の横に座つて、うつむいて御飯を食べているものがあつた。あたしは何の気もなく蔵くらまえ前にいって、階段に足をかけながら振りむくと——正しょうのもののお化ばけかと思つた。キヤツともスツとも声が出ないで、びつくらして見詰めていると、ニヤとしたように赤い唇を歪ゆがめて、上の方についてる片つぱの眉まゆをピクリと動かした。

——その鼻は、お茶碗わんの中を突つつくほど高く、のめつていた。長い長い瘦やせた青い顔、額に深い大きな痕きずあとがあつて、そのために片つぱの眼がつりあがり眼玉が飛出している。髪の毛が額にぶるさがつて、細こつこい肩——体なんぞは消きてしまつて、顔ばか

りしかないように見えた。大きな飯櫃おはちの蓋ふたを幾度も幾度もあけて、山のように飯を盛ると、すぐにまたよそつている。やつとそれがすんでしまふとお膳を押し出して、だまつて、吃驚びっくりしているあたしの顔をギロリと見た。

それが鎗やり一筋あるじの主だという加頭義輝だった。眼まなこの強い、おなじように長い顔だが色の黒い輝夫という人が、紬つむぎの黒紋附きりぎりすを着て来ていたが、大變理屈おびずきで、じきに格式を言出していた。あたしが脅おびえきつっていると、怖こわくはない、加頭の兄あにさんで、おとなしい人だと家の者がいった。あたしは武士だった人たちだから刀疵きずであるうと思つて凄あはいけれど敬意をもつていたら、あの人はあんまり遊あそんでばかりいたのであんな顔になったのだと言つたものが

あつた。

「いや、怖いはずです。」

と親味の弟でさえ言つた。

「私たちでさえ、見なれていてもギョツとする時がありますからな、好い気持ちに寝ていてふツと目を覚すと、知つていながらよくはありません。一ぱい機嫌で帰つた時なんか、お世辞なんぞいつてくれない方がいいと思いますよ。」

「行燈あんどんのそばに、立たてひぎをして、横むきだったら、菊五郎の庵室せいげんの清玄だね。」

と父でさえいつた。

末の弟は特長の無い、それだけ普通の人だった。この一家は中

の弟が家長になって、兄貴の方が居い候そうろうだった。女たちは封筒を張ったり、種々の内職をしていたが、時々男たちは殿様気分を出して威張った。三番目のあたしの妹を可愛がって、自分の家へ連れていってしまふこともあった。あたしたちは幼いお丸ちゃんによくこういって聞いた。

「あの顔こわくない？」

名の通り円満なおまるちゃんは首を振って笑っていた。

アンポンタンと妹のおまつちゃんは上野のお花見に、父に連れてつってもらった時——もう夕方だった。多くの人が浮かれながら帰ってゆくあとを、父は子供の方は忘れたように桜を見ながらブラブラ歩いていた。二人は手をつないで後からついていったが、

そろそろ暗くなりかけた時、賑やかな一団が、間は離れていたが摺れちがった。鉢巻をした男の頭に肩車をして縋すがっている小さな女の子がいる。よく見るとおまるちゃんだった。赤いはだぬぎで、おんなじように鉢巻きをしていた。それをとりまく男女の一群は、みんな片はだぬぎで、赤や鬱金うこんの木綿の鉢巻きをしてはしやいでいた。

「ああおまるちゃんだ。」

彼女の小さい姉たちは声をかけた。

「おまるちゃん——」

彼女は男の頭の上から答えた。

「亀かめの年だあい。」

そして、キヤツキヤツと悦よろこんで男の頭を叩たたいた。叩かれていますのは理屈やの輝夫だった。

「そうだ、そうだ。」

と男女は陽気に合づちをうって行きすぎてしまった。

父はちよいと振りかえって笑いかけたが、声はかけなかった。

あたしたちは、振りかえり振りかえりして、おまるちゃんが自分たちの方へこようとしなかつたのをさびしがった。ひよいと方向が違ってしまったと見えて大たい木ぼくの根をグルリと廻って見ても、そこに父の姿は見出せなかった。

迷まい児ごになつてしまったのだった。二人はベソをかくのを隠しつこをしてウロウロしたが上野の山は桜が白くこぼれて、山下の燈

があかるいほどなおさびしかった。鐘つき堂の鐘が鳴った――

ふと、青石横町の、母方の祖母の家で、寝ざめや、寝ぎわにきいた、三ツは捨て鐘で、四つめから数えるのだときいたことから外祖母の家を思いだした。おばあさんの家へ行っていたら、父がたずねて来てくれるかも知れないと気がついた。青石横町にいると、五月雨さみだれの雨上りの日など抄すくい網をもつて、三枚橋の下へ小蝦こえびや金魚をすくいに来たから、石段をおりれば道は知っていた。おさないはらからは、手をつないで、ぼんやりと、暗くなつてからやつとその家に辿たどりついた。

おまるちゃんが「亀かめの年」といったのは、よく諸方で可愛がら

れる子で、近所の——そばや利久の前の家——酒屋で、孫娘のよ
うに大事にしてよく借かりに來た。お酒がすきで、亀の年という甘い
お酒（瀬戸物の大きな瓶かめのかたちの器にはいつていた）をのませ
たのでその名をよく覚えてしまつて、ある時、お前は卯うの年、お
前は巳みの年と年寄りが言つていたらば、

「あたしは亀の年。」

といつて、それから自分の名にしてしまつていたのだった。

この加頭一家は、十一月の酉とりの町には吉原土手へ店を出した。
熊手の簪かんざしを売つたこともあつたが、篠せうに通したお芋を売つた。が
りがりの赤目芋だった。それを一家中が前の日の夕方から担ぎだ
して、戸板まで運びこんでゆくのだつた。新智識の代言人の書生

さん一家が、黒紋付きで、あるいはカンゼよりの羽織ひもの紐ひもで、あ
るいは古新聞で畳タバコんだ十二煙草入れをもつて、西とりの町きわものの際し物師
となる。いらつしやいいらつしやいと景気よく呼ぶのだそうだが、
あたしにはどうしても勢いのいい景色が思いうかばなかつた。

後にアンポンタンが十六の時祖母が死んだが、その時、この兄
弟がたてた葬式のプランが、なんにも知らない町娘のあたしをさ
えふきださせた。

彼らはいった。昔の士分の格式にして、この家の生活はいくら
か！

甲こうろん論、乙おつぱく駁、なかなかにまとまらない。長い長い巻紙へ書

き出してきたのを見ると、あたしが馬車へ乗つて白無垢しろむくを着る――

まだ、そこまではまず好いとして、おさげ髪、額まゆずみに黛！

ばかばかしくなつて腹が立つた。江戸っ子のおやつちゃんは浴衣がすきだ——ともいえなかつたが——

そういつたも無理がないと思つたのは、仕立屋で博識ものしりで、や

はり三百の組の井坂さんが話したことだが、この加頭一家の輝夫が死んだ時——もう家の書生はしていなかつた——陋巷ろうこうに死し

たのだが、例の格式で、借りものの白むくの三枚重ねを女たちはみんな着たが、肝かんじん、心のやかましやがさきへ死んだので、細君——

——昔の旗本何千石かの奥方は、結びがみのまま、しかも下駄ひよりげたをかうのをわすれて古びた日和下駄ひよりげたをはいていったと——

井坂さんは類たぐいまれな世話やきの親切ものだった。向う新道の、例の角のおいもやさんの後の、大丸のおあぐさんの家の塀の前に住んで小僧さんと職人の三、四人がいた。暮になると人を増していた。いつも綿を入れたり、火熨ひのし斗をかけている女房おかみさんは、平ひらおもて面おもてではあつたが目に立つ顔で、多い毛を、太い輪わのおばこに結っていた。岩井松之助という、その頃の女形の役者に似ている気がした。親方井坂さんは腕の好い仕立職人だが、どうもじつとして仕事が出来ないと思え町内のことから、何かからから成田山の講元でもあれば裁判所のことにも興味をもっていた。だから、ある時は、修験者のかける大きなつぶの数珠じゆずを首からかけ

である。

彼には妙な癖があつた。「先生」とよぶと、ちよつとお耳を拝借と傍そばへいって、掌をひろげて扇がわりにして何かひそひそと囁ささやく。別段の用事でなくても誰にでもそうだが、ちよいと見にはいかにも腹心の者らしく見える。曾呂利新左衛門そろりしんざえもんを講釈から学んだのではないだろうが、その癖は母などをいやがらせた。

その店にスリで有名になつた仕立屋銀次がいた。そのころ、親方浜さんも大たぶさ、銀次も大たぶさだつたかと、うろおぼえではあるが覚えてゐる。銀次という職人は青い顔の、眼の横に長い、刀のような目附きの人だつたと思う。祖母が言つたことがある、あの職人は、鼠小僧ねずみこぞうによく似てゐると——鼠小僧は神田和

ずみちよう

泉町にすんでいたが——区はちがつても和泉町は近かった——
祖母はよく見て知っていたといった。引廻しの時も、前のうまや
から馬が出て大通りを通ったが結城ゆうきの着物をきて薄化粧をしてい
たといった。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年4月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

古屋島七兵衛

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>